

「『助かる人、助ける人』となるために」

平成 25 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校 高知県立城山高等学校

I 学校における背景、問題意識

今後 30 年以内に 70% 程度の確率で起こると言われている南海トラフ地震や津波に備え、生徒には自分自身を守る意識と、また、他の人たちを支援しようとする意識や態度の育成が望まれる。しかし、避難訓練等を実施しているものの、緊迫感に欠けるのが現状であり、生徒の地震や津波に備える意識そのものも未知数であり十分とは言えない。

今回の推進事業を受けることで、生徒や教職員の地震や津波等の危機に対し備えるという意識を高めるとともに、震災後にどのような行動をとるのかのイメージを膨らませて実際の事態が起きた時に備えたい。

II 取組のポイント

生徒や教職員の地震や津波等危機に対し備えるという意識とスキルを高めるとともに、本校は地域の避難所として指定されていることから、地元中学生や地域住民を巻き込んだ震災後の避難生活も視野に入れた事業内容を計画して取り組んだ。

地域の防災アドバイザーである高知大学の原准教授や、地域の関係者を委員とする実践委員会を発足させ、実施事業内容についてのアドバイスをいただきながら取組をすすめた。

教職員に対しては、この事業の趣旨目的等を説明し、取組の方向性を示した。また、実践力を高めるため、外部講師を招いての救急法の訓練や校内研修会等を行った。

生徒に対しては地震・津波等の災害に関する基礎的な知識を確実なものとするため、外部講師による講演会や各学年団が中心となって企画した防災学習ロングホームを実施した。そして、生徒会と

各クラスの保健委員で構成した生徒防災委員会を組織して防災学習に取り組み、須崎高校主催の南海地震フォーラムへの参加や文化祭での防災学習発表等を行った。

最後に、例年行っている生徒課題別研究発表会と関連付けて研究発表会を開催し、生徒の研究発表と全学年の公開授業を行い、取組の総括を行った。

III 取組の概要

1 防災教育でつきたい力

- 知識、思考・判断
 - ・地震、津波について理解する
 - ～ただしく恐れ、共に立ち向かう！～
- 危険予測・行動
 - ・「助かる人となる」
 - ～自分の身を守ることができる～
- 社会への貢献
 - ・「助ける人となる」
 - ～「自分にできる役割」を考え
行動できる～

2 城山高校の防災教育目標

- ①自分の命は自分で守ることができる
- ②自分にできる役割を考え行動する力をつける
- ③安全な社会を支える社会人となる

3 取組内容

(1) 効果的な避難訓練の実施

<平成 25 年 4 月 11 日>

中高合同の避難訓練



城山高校は、毎年2回の地震災害時の避難訓練を、津波による浸水が予想される赤岡中学校と合同で実施している。

この日は、授業中に大津波警報が発表されたことを想定して、城山高校屋上に中学生と高校生が安全を確認しながら避難した。

中学生は、津波が予想される時は、すぐに高校に避難することを常日頃から意識しておくこと、また、中学生も高校生も自分が「助かること」が「助ける人」につながるという意識を持つておくことの大切さを確認した。

※「防災の日」に予定していた訓練は悪天候のため、屋上への避難はできなかった。



【平成24年度卒業生より寄贈された、避難用品を備えたロッカー】

(2) 中高合同・防災講演会

<平成25年5月8日>

「南海地震に備える」

講師：高知大学農学部

准教授 原 忠 氏

高知大学農学部の原忠准教授を講師として招き、「南海地震に備える」をテーマに講演を行っていただいた。南海地震へ

の備えや地震・津波による被害想定等の基礎的な知識を赤岡中学校の生徒と合同で学んだ。



(3) 防災講演会①

<平成25年9月1日>

「3.11 その時何が起きたのか」

講師：宮城県女川町役場

企画課課長 鈴木 浩徳 氏



宮城県女川町役場企画課の鈴木浩徳課長を講師として招き、東日本大震災当時の被害状況や復旧・復興に向けた町づくりについて講演を行っていただいた。深刻な被害状況の中、多くの町民は、海との共生を希望し、防災というよりは減災を中心とした津波対策、町づくりをすすめていることや、津波体験を無駄にしたいくない、後世に伝えたいという思いが本校生徒に伝わった。

(4) 防災講演会②

<平成25年11月6日>

「必ずくる巨大地震に備えて」

講師：高知県立伊野商業高等学校

教諭 谷内 康浩 氏

高知県立伊野商業高等学校の谷内康浩教諭を講師として招き、「必ずくる巨大地震に備えて」をテーマに講演を行っていただいた。地震のメカニズム等の解説や、生徒一人一人に渡した意識カードを利用して、地震や津波の正しい防災認識を生徒に伝えていただいた。

その後、ランダムに分けた班ごとに、震災時の様々な場面でどのような行動をとるのか、その心理状態等をまとめ、討論会を行うことで、震災に対する心構えを身に付けた。



『その時、あなたは?』 質問例

「1日が終わり、姉妹（兄弟）が同じ部屋で寝ていた時に、恐れていた南海トラフの巨大地震が発生。震度7の揺れで家は全壊し、自分は何とかはい出して無事であった。津波が来るので逃げようとした時、がれきの下から手が出てきて「助けて!」と妹（弟）の声。引っ張り出そうとしても出てこない。津波が沖合に見え、すぐ逃げないと自分も死んでしまう。」

妹（弟）を助けますか？
見捨てて逃げますか？



(5) 防災に関する指導方法の開発

<平成26年1月22日>

「平成25年度 実践的防災教育推進事業
研究発表会」

◎テーマ

「助かる人、助ける人となろう」

◆生徒による研究発表

○防災に関する研究発表

1年生は、課題別研究発表のなかで、地震・津波、大雨による洪水、土砂災害、雷の被害等の自然災害に関する研究発表を毎年行っている。今年は、研究発表会のなかで地震・津波について発表した。



東日本大震災で大きな被害が発生したことから、なぜ巨大地震が起きるのかその発生メカニズムについて発表している様子である。そうした場合、どのように減災していくかが課題であり、これからの学習の目標となる。

◆公開授業

○1年 ホームルーム活動

「通学中に地震が来たら？」

指導者：横田 真一

登下校中に地震が来たらどう避難するかをテーマに、『南海トラフ地震に備えちよき（高知県）』を教材として活用しながら、住んでいる地域別に分かれてグループ学習を行った。



○2年 ホームルーム活動

「チームで取り組む一次救命処置」

指導者：豊永 典子

2年生は災害時を想定した一次救命について訓練した。生徒は、前時に心肺蘇生法（人工呼吸・胸骨圧迫法、AEDの使用方法）について、DVDや教員による模範により学習している。本時は、班別に分かれての実技学習を行った。



行った。

救護活動班は、陸上自衛隊高知駐屯地の自衛官3名の方から、津波により被害者が出たことを想定した、負傷者の移送方法について実践指導を受けた。

まず、2人1組でペアを組み、負傷者を運ぶ訓練を行った後、毛布での簡易担架の作り方や、その運搬方法を詳しく学習した。



○3年 ホームルーム活動

「避難生活で私たちができること」

指導者：松岡 均

城山高校は、香南市の災害時避難所となっている。3年生は、避難生活での留意点や、避難所の特徴を理解し、自分たちができること、役割を考えた。もうすぐ卒業であるが、社会人となって、今後活かしてほしいと思う。



食糧班は、野外でかまどを使った炊飯の予定であったが、悪天候のため屋内調理室を使い、本校に備蓄してある非常食の調理・試食を行った。



(6) 地域や防災関係機関との連携

①<平成25年9月1日>

災害時の救護活動訓練

講師：陸上自衛隊高知駐屯地

第五十普通科連隊 自衛官3名

避難訓練後、生徒を救護活動班と食糧班の2つのグループに分けて体験学習を



また、この簡易担架を使った運搬方法は、9月27日に開催された体育祭での防災競技に活かされ、毛布を使った簡易担架づくりを取り入れたリレー競技を行った。



②<平成25年9月14日>

「南海地震フォーラム」への参加

須崎高校が主催して行っている南海地震フォーラムに、本校から生徒防災委員会のメンバー6名が参加した。そのうち2名がパネルディスカッションに参加し城山高校の取組を発表した。

参加した室戸高校、高知工業高校、須崎高校がそれぞれの地域の状況に応じて、高校生としてできる取組をしているという発表を聞き、城山高校の生徒として何ができるかを考える良い機会となり、今後の取組の参考となった。



③<平成25年10月27日>

ガラス飛散防止フィルム貼りと

炊き出し訓練

地震時のガラスの破片等の飛散防止のため、PTA主催でガラス飛散防止フィルム貼りをを行った。当日は、専門業者の方2名を講師として招き、保護者10名、生徒15名、教職員14名が指導を受けながら3年生の教室廊下側ガラスに飛散防止フィルムを貼った。

これから本校の全ての窓ガラスに順次広げていく予定である。



また、当日は9月1日の防災訓練の際にできなかった、炊き出し訓練も行った。

校庭にかまどを設置し、ご飯を炊いた。味もよかったという感想が多かった。今後、震災が起こった時、本校は避難所となるため、この訓練の経験を活かし、慌てずに対応したい。



IV 成果と今後の課題

今回の推進事業においては、生徒や教職員の防災に対する意識とスキルを高めること、また、本校が香南市の避難所として指定されていることから、避難所としての役割が担えることを目的として取り組んできた。

1 取組の成果

- (1) 防災教育の全体計画・指導計画ができたこと。
- (2) 赤岡中学校・地域と合同での避難訓練や炊き出し訓練、救護活動訓練、また、講師を招いての講演会や『高知県安全教育プログラム』を活用した本校教員によるロングホームルームでの授業実践により、生徒に地震・津波等に対処するための必要な知識とスキルを身に付けることができたこと、それと同時に教員自身の意識とスキルを高めることができたこと。
【アンケートから】
学校周辺への津波到達時間について、正確に知っている生徒の割合が、4月当初と比較して、1月の調査では19ポイント増加した。また、自宅の避難ルートや避難場所を確認したことがあると回答した割合が3ポイント増加した。
- (3) 生徒防災委員会（各クラス2名の保健委員と生徒会会長・副会長）を組織し、生徒の自主的な取組ができ、特に須崎高校主催のフォーラムへ参加し他校の取組を知り、視野を広げられたこと。
- (4) 城山高校実践委員会を組織し、地域の防災アドバイザーである高知大学の原准教授や、地域の関係者から防災教育や避難所としての在り方について意見をいただいたこと。

- (5) P T A主催の取組ができ、保護者への取組が一定なされたこと。

2 今後の課題

- (1) アンケートの結果等から、生徒の意識とスキルの向上は見られたものの、期待したほど伸びてはいないため、より緻密な計画に基づいた取組が必要である。特に、様々な状況に対しても備えることができ、適切な行動ができる知識とスキルをさらに身に付けさせなければならない。
(ロングホームルームの時間だけでなく、各教科での防災教育の取組をすすめる。)
- (2) 生徒防災委員会をさらに活性化し、自主的な生徒の取組を活発化させ、意識とスキルを高める。
(定期的な活動を行い、「南海地震フォーラム」での発表や体育祭で防災競技を企画する。)
- (3) 北舎外付け階段を利用した屋上（海抜22m）への避難訓練や地域と合同での炊き出し訓練、地域・行政と連動した避難所生活を想定した運営の訓練を実施して、地域の避難所としての準備を整える。
(避難所運営のマニュアル作成・香南市との連携強化)

3 今後に向けて

本年度行なった防災教育はどの内容も継続できるものばかりであることから、本年度を本校の防災教育の新たな出発点と位置付け、今後も継続・発展させていきたい。